

学生による教育実習の自己評価について

—実習期間における学生の自己採点の試み—

The self-evaluation of the student teaching

—An attempt to student's self-evaluation on the practice—

常 田 奈津子¹⁾

Natsuko TOKIDA

Abstract

This research aimed to confirm how the student participated in the children's activities at a kindergarten. A questionnaire (18 questions) for self-evaluation was prepared.

Objects were senior students of the child development major. A period of student teaching was four weeks in June, 2002.

According to results of questionnaire, the student who could well participate increased in the 4th week, that is, numbers of the student who well participated became double times of the first week.

keywords : self-evaluation, practice, student, kindergarten

I はじめに

保育者をめざす学生は教育実習、保育実習をとうして、子ども達と直接的な関わりをもち、現職保育者の指導・援助を受けながら、様々なことを学んでいく。学生自身は実習期間において1日ごとに反省し、次の日の活動へとつないでいく。その繰り返しは保育の本質や保育現場をより深く理解し、保育者としての自覚を促し学生達を成長させていく。そこで、学生自身が実習中におこなう1日の反省と翌日の課題を具体的に取りあげて実習の評価に生かしていくことができないだろうか。本学での実習評価については、実習終了後に実習園から送られてくる評価表、実習記録ノートの提出、実習体験談の発表などで総合的におこなっている。しかし、それらは実習後の評価で他者が成果を読み取るものであって、学生が学ぶことができたと自分自身で評価できるものではない。

実習での学生がおこなう自己評価について、大塚ら²⁾は、「実習指導を行なう場合、実習園・所側の評価は無論大切ではあるが、学生個々が実習をどのように受けとめ（いわゆる自己評価）次の実習や就職活動に

生かしていけるかも重要である」と述べている。

また、帰山ら³⁾は実習体験が自己学習の場として「①他人のものでなく学習者自身のものであり、主体性が求められる②実習は肌で感じ、実感的に受けとめることから出発する③今ここに起こっていることに何らかの具体的対応が求められる。逃げ出すことや後回しにすることができない④さまざまな問題が生じ問題意識が生まれる可能性がある⑤試みる学習であり、新しい状況に挑戦することができる」とその重要性を述べている。

学生が自己学習、自己評価をおこなうことは実習していくうえで自分がどのくらい保育の活動に取り組みたかを確かめることである。学生ができるだけ具体的に自分自身で実感でき、実習での新しい状況にどう対応したかを自分で評価できる方法はないだろうかと考えた。そこで、学生が実習中に自分自身でできる自己採点表をもとに、学生による教育実習の自己評価を実施してみることにした。

学生が1日の反省を生かし、さらにより意欲的に実習に取り組むことができるようにと考え、毎日の実習ノートを書く時間を利用して短時間でチェックできる18項目のチェックリストを作成し、自己採点表として実習前に学生へ配布した。

1) 日本女子体育大学（助教授）

今回の調査は2002年6月に4週間の幼稚園実習を行った幼児発達学専攻の4年生を対象に行い、自己採点表の結果と学生が実習後に書いた自由記述の自己評価について考察した。

II 方 法

1. 調査方法

- ① 幼稚園実習の事前授業の中で学生に配布した自己採点表の付け方についてオリエンテーションをおこなう
- ② 自己採点表は18項目になっており、実習期間中毎日実習ノートを記入する時にチェックするよう指示する
- ③ その18項目の中で『今日、自分ができた』と思う項目に印をつけていく
- ④ 実習後、そのチェックリストをみて、結果および自己評価をレポートにして提出する

2. 自己採点項目

自己採点項目は、学生が実習中におこなう保育活動を主体的に取り組み、どのように対応できたかを確認できる内容とした。以下に、その18項目をあげる。

1. はっと気づくことがふえたか
2. 落ち着いて子どもと一緒にいられたか
3. 落ち着いて子どもたちの前に立つことができたか
4. 子どものはたらきかけを十分に受けとめることができたか
5. いろいろな子どもにはたらきかけることができたか
6. 子どもたちと一緒に楽しく遊ぶことができたか
7. 子どもの遊びに参加しながら、まわりの動きにも関心を向けることができたか
8. 自分から進んで役割を見つけて行動できたか
9. 「今だな」と思って、行動に踏み出すことができたか
10. 子どもたちの物の取り合いやいざこぎの場面で、適切にかかわることができたか
11. 子どもにかかわるときに、いろいろなかわり方があることを意識して、工夫できたか
12. 場面を設定したり、遊具を生かして遊びを発展させることができたか
13. 子どもたちにわかりやすい声の出し方、スピードで話ができたか

14. 一人一人の子どもにかかわっているとき、クラス全体の様子も同時にとらえることができたか
15. 子ども集団全体を指導しているとき、一人一人の動きをとらえられたか
16. 子どもたちが今取り組んでいる活動の充実を大切にしながら、次の活動の方向性を出すことができたか
17. わからないこと、不確かなことを自分から質問できたか
18. 責任実習で子ども集団が楽しく、充実した活動ができたか

3. 調査期間：平成14年6月3日～6月28日(4週間)
4. 調査対象：日本女子体育大学 幼児発達学専攻4年生 38名

III 結果および考察

1. 自己採点について

学生が毎日チェックをおこなった自己採点表から、学生が『できた』とチェックした項目は1点、チェックしなかった項目は0点として点数化する。さらに、1～5日目(1週目)、6～10日目(2週目)、11～15日目(3週目)、16～20日目(4週目)の期間に区分し、1週ごとに平均値を示したものが表1である。

1) 時間の経過から

1週目から週を追うごとにほとんどの項目で『できた』とチェックする学生が多くなっている。また1週目と4週目を比較するとチェック数は約2倍になっている。

実習が進むにつれひとつひとつの項目を自分の課題として実習に取り組んでいったことがうかがえる。

各週ごとにみていくと、1週目は「2」「5」「6」「17」の4項目で60%以上の学生が『できた』とチェックしている。その中でも、特に「6」の子どもと一緒に遊ぶことができたという学生が80%以上おり、実習の1日目では89%、5日目は97%の学生が自己採点している。学生達は、入学して4年、この間子どもとかかわる機会を多くもって幼稚園実習をむかえることができたので、実習1日目から積極的に遊びの中に参加でき、いろいろな子どもに働きかけることができたのではないだろうか。

また、「17」のわからないこと、不確かなことを自分から質問できたという学生も多く、実習指導者である

表1 学生の自己採点

幼児発達学専攻 4年生 (2002年6月)

自己採点項目	実習日			
	1週目	2週目	3週目	4週目
1 はっと気づくことがふえたか	37.4%	60.5%	66.0%	73.7%
2 落ち着いて子どもと一緒にいられたか	68.9%	80.0%	79.3%	86.9%
3 落ち着いて子どもたちの前に立つことができたか	42.1%	55.3%	65.4%	78.3%
4 子どものはたらきかけを十分に受け止めることができたか	41.6%	61.6%	53.2%	62.9%
5 いろいろな子どもにはたらきかけることができたか	63.7%	80.0%	70.7%	74.9%
6 子どもたちと一緒に楽しく遊ぶことができたか	88.4%	82.1%	85.6%	84.0%
7 子どもの遊びに参加しながら、まわりの動きにも関心を向けることができたか	39.5%	63.7%	64.4%	73.7%
8 自分から進んで役割を見つけて行動できたか	53.7%	65.3%	63.3%	62.9%
9 「今だな」と思って、行動に踏み出すことができたか	23.2%	32.6%	39.9%	46.9%
10 子どもたちの物の取り合いやいざごとの場面で、適切にかかわることができたか	31.1%	39.5%	46.8%	45.1%
11 子どもにかかわるときに、いろいろなかわり方があることを意識して、工夫できたか	31.1%	43.7%	48.4%	52.0%
12 場面を設定したり、遊具を生かして遊びを発展させることができたか	25.3%	35.3%	36.7%	41.1%
13 子どもたちにわかりやすい声の出し方、スピードで話げできたか	58.9%	70.5%	69.7%	76.0%
14 一人一人の子どもにかかわっているとき、クラス全体の様子も同時にとらえることができたか	27.9%	47.9%	53.2%	60.6%
15 子ども集団全体を指導しているとき、一人一人の動きがとらえられたか	2.6%	18.9%	27.1%	38.9%
16 子どもたちが今取り組んでいる活動の充実を大切にしながら次の活動の方向性を出すことができたか	10.5%	25.8%	28.2%	36.6%
17 わからないこと、不確かなことを自分から質問できたか	68.4%	63.2%	60.1%	70.9%
18 責任実習で子ども集団が楽しく、充実した活動ができたか	0%	10.0%	6.9%	30.3%

保育者との人間関係もスムーズにはこんだことがわかる。学生にとって実習前の一歩の不安は「子どもに受け入れられるか」「先生とうまくやれるか」であることから今回の実習では、1週目で多くの学生がその不安を自分自身で解決できていたようだ。

2週目になると、「1」「4」「7」「8」「13」の5項目で60%以上の学生が自己採点している。この結果から、学生は2週目に入ると、担当のクラスや園での仕事内容が少しずつ理解できるようになり、自分の役割がつかめるようになってくる。また、子どもとの対応をみてもただ一緒に遊ぶだけではなく、まわりの子どもの様子も見ながら、一人一人の子どもに対してどのように受けとめたらよいかを考え、一歩踏み込んだ対応をするようになってきている。また、子どもにとってわかりやすい声の出し方、スピードで話すことにも気をつけるようになり、保育者として必要なスキルにも目が向けられるようになってきている。

4週目に入って、60%以上の学生が『できた』と採点した項目は「14」で、その内容は、「一人一人の子どもにかかわっている時、クラス全体の様子を同時にとらえられることができる」である。これは、部分実習や責任実習などを多く経験した結果、実習生として、

一人一人の子どもに対応しながら、まわりの動きに関心が向けられていくようになり、その上さらに、クラス全体の様子も同時にとらえられるようになってきている。このことから、4週間の幼稚園実習では学生の自己学習が充実していたことがうかがえる。また実習期間が、連続して4週間であったということは、4週間がたらく長い時間ではなく、3週間で行なってきた実習を4週間目でより充実させることができたのではないだろうかと考えられる。

2) 自己採点項目から

自己採点18項目を「子どもと直接かかわる」「子どもへ働きかけ、子どもを受けとめる」「学生の行動に関わる」「子どもに指導(責任実習を含む)する」の4グループに分類して考察する。(図1)

① 子どもと直接かかわる項目

「2」「6」「7」の項目は実習前半で60~80%の学生が『できた』とチェックしている。これは子どもとの関係が緊張せずにスムーズにつくることができたということであろう。その反対に「12」は4週とも50%以下である。これは、子どもの遊びや活動を発展させて次の活動へ方向づけていくことは、保育者として経験を積んでいても高度なスキルと子どもへの理解が求め

図1-① 子どもと直接かかわる項目

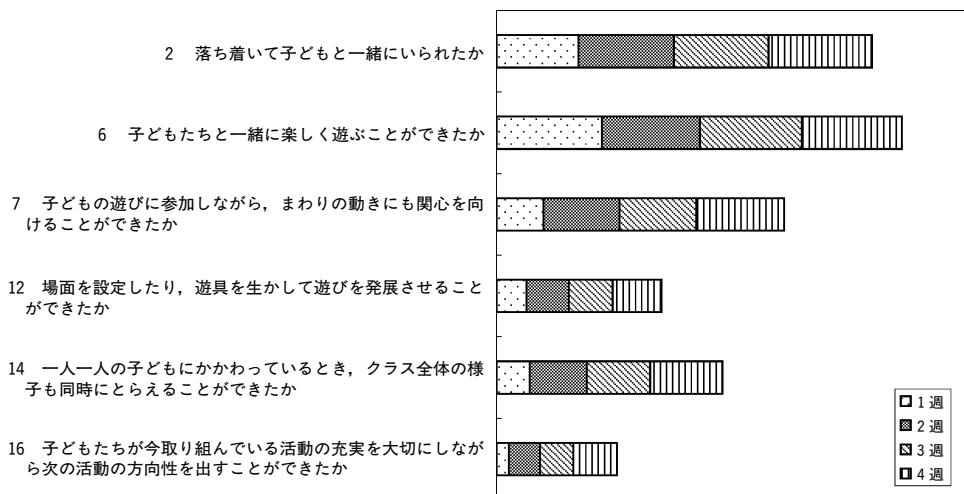


図1-② 子どもへの働きかけ、子どもを受けとめる

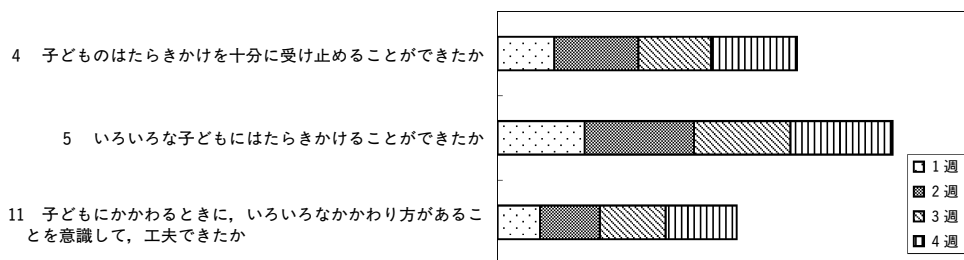


図1-③ 学生の行動に関わる項目

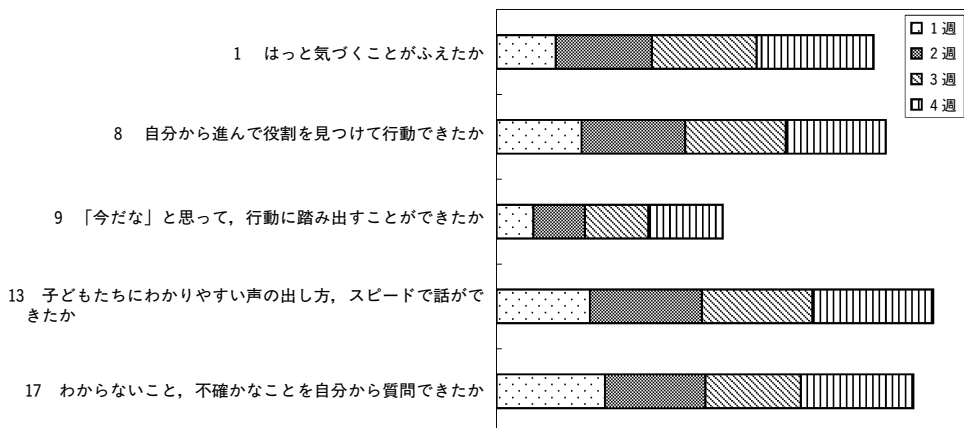
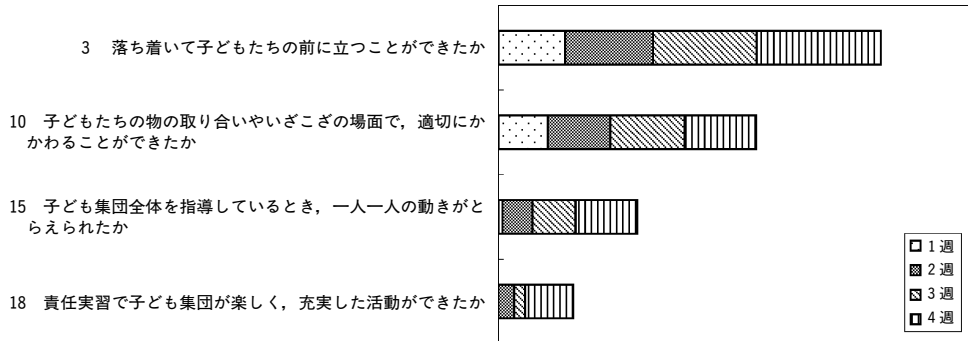


図1-④ 子どもへの指導（責任実習を含む）を行う項目



られる項目であり、学生はそのことをよく理解して採点していたと思う。しかし、このことは保育の目標としてはいつでもどこかで意識している項目である。学生の中にはいつでもではないが『できた』と感じているものもある。このことから、学生には目標とし、達成できるように努力する項目も大切であると考えられる。

② 子どもへ働きかけ、子どもを受けとめる項目

「4」「5」は週の前半から『できた』と評価する学生が多かった。これはまず、実習生は子どもと一緒にいる、またはそばにいて援助するという立場を強く意識するので、子どもを受けとめようとする気持ちがしっかりとできあがっていることがわかる。

③ 学生の行動に関わる項目

実習では学生の積極的な行動が求められるが、自己採点をみると週を追うごとにチェックが多くなっており、4年間の実習体験で消極的な面を克服してきていると思われる。しかし、自分で判断して「9.『今だな』と思って行動に踏み出すこと」は実習生の立場として難しいことであったのだろう。

④ 子どもへの指導（責任実習を含む）を行なう項目

「3」は3、4週目になると60%以上の学生が『できた』と採点している。実習後半になると部分実習などを毎日行なうようになってくる。子どもの前に立つことにも慣れてきて、子どもも実習生に親しく対応してくれる。その結果、落ち着いて子どもの前に立つことができるようになってくる。「18」は、徐々に子どもの前に立つことに慣れてきてはいても、責任実習（研究保育）は特に緊張するので、学生がうまくいかなかったと思い、自己採点が厳しくなったと考えられる。

2. 学生の自由記述による自己評価について

学生は自己採点表を見ながら、幼稚園実習の自己評

価をレポートに書いて提出した。その内容についてみると、総合的に評価した学生、週単位で評価した学生、そして各項目別に評価した学生にわかれた。

全体として、学生が毎日自己採点表をつけた結果、「毎日『自己採点表』を付けることで、その日を振り返り出来た点、出来なかった点が明確になり次の日の課題がよくわかった」「毎日、小さなことでも目標を持って子どもと接したら保育することに自信が持てて前向きに子どもと楽しく接することができてもよかった」「日数が過ぎるにつれて落ち着いてまわりの様子が見え、意識して活動を行なったので採点項目のチェックすることも多くなってきた」「毎日の中で1日を振り返って自己採点しこれを意識して行なうのは大変なことだけれど大切なことなのだ」と実習が終わって改めて感じた」「1週目と4週目の成長の違いを自分でも感じた」と述べている。

また、採点項目でみると、多くの学生が、一人一人の子どもへの働きかけとクラス全体をみていくことの難しさを感じている。「採点表を見て気が付いたことは、子どもとは積極的に遊んでいるが子どもの遊びを発展させたり、ことば掛けが少なかつたかなと反省した」「これからの課題として、全体を見ながら個々の動きをとらえたり、子どもとの関わりや遊びの中で工夫をしていかなければならない」「一人一人や数人の子どもに関わっている時に全体を見ることができなかつたし、全体を見ようとすると目の前のことがおろそかになってしまいそうだった」「一人の先生が28人の子どもに対してどのように対応すればよいのか考えさせられた」などが学生の意見としてあった。

また、自己採点に関連する問題として、実習園によって実習の内容（クラス配属とその期間）が異なることがある。クラスの配属では、同じクラスに2～4週間

入って実習を行なった学生は、「同じクラスに2～4週間入ったことで子ども一人一人の性格がわかり、子どもの働きかけがわかるようになった」その反対に、2、3日交代でクラスに入った学生や毎日異なったクラスに入った学生は十分に子どもと関わりがもてず、クラス外の仕事にも追われたために「子ども達の前に立つ機会が少なかったのもう少し経験させてもらいたかった」と述べていた。それについての検討は今回でしかなかった。

学生の自由記述による自己評価についてまとめると次のようになる。①学生は自己採点表をつけながら、毎日反省と課題をもって実習し、ひとつひとつの課題を目安に自己学習している②自己採点(チェック)も日を迫うごとに多くなり、それを励みに行動している③4週間の実習を通して、学生は子どもとのかかわり、保育者と子どもの関係、保育の方法、保育者の仕事、園の雑務など、幅広く保育をとらえている。

IV まとめ

今回の調査は、自己採点表を用いて、学生が実習体験をどのように自己評価できるかを検討してものである。

自己採点表は学生が実習中毎日チェックした。その結果、教育実習の4週間、週を迫うごとにチェックする自己採点項目が多くなり、実習が進むにつれてひとつひとつの項目を自分の課題として取り組み努力していったことがわかった。また、自由記述の中では、学

生が自己採点表をつけながら反省をして、自己課題をもち、その課題を目安に自己学習をしていることがうかがえた。

このことから、自己採点表による教育実習の自己評価の試みは、学生にとって自己採点の実習に対する自覚を促し、目標や課題をもって取り組むには有効であると考えられる。しかし、本調査で用いた自己採点表の項目は試案であり、各項目の内容についてはさらに検討を加える必要があるだろう。また実習内容の違いによる自己採点への影響など課題はあるが、学生が自己採点することで実習を他人のものでなく学習者自身のものとし、肌で感じ、さまざまな問題に立ち向かって新しい状況に挑戦することができるようになれば、学生の実習効果はさらにあがるだろうと考える。

引用文献

- 1) 婦山俊二, 笹 光夫(1997) 保育者養成の学習統合化に関する一考察—体験学習を通じた自己形成の試み—日本保育学会第50回大会研究論文集99頁
- 2) 大塚健樹, 吉田恵子, 斎藤 修(2001) 教育実習保育実習における実習評価と自己評価の検討 盛岡大学短期大学部紀要第11巻24号19頁

(平成14年9月24日受付)
(平成14年12月12日受理)